



思いやり

おも

中西 進
なかにし すずむ

今日、タクシーに乗ったら、とても話し好きな運転手だった。いろいろと話しかけてくる。その途中で道路のことにあった。

「ああ、あの道ですね。ヒルキンに、よく通りましたよ」と運転手。

「うん?」、一瞬私は彼が何をいっているのか、理解できなかった。とくに「ヒルキン」とは。仕方がない。

聞き返してみた。「何?」

「今はヤキンですが、ヒルキンは道が混んでますからね」

それでやっと話が通じた。「昼勤」と彼は言っているのである。交代制で昼間の勤務と夜間の勤務とがあるらしい。それにしてもことばのルールから言えば、ヤキンの反対はチュウキンのはずだ。会話ことばでは夜間に対して昼間が対応するから、このように整わないことになった。

当事者には何の疑問もおこらないのだろうが、部外者にはなかなかむづかしい。

じつは同じ経験をつい先日しました。一人の事務職員が「私もチョコホーにひっかかったことがあります」と言った。

さあ、私には「チョコホー」がわからない。いや、わからない前に聞きとれない。はたして「チョコホー」といったのか「チョコ棒」といったのか、直法? 地合法? と頭の中でことばがぐるぐる回転する。

「え、何ですって」と聞き返して「地方公務員法」のことだとやっとわかった。

こうしたことばは、いわばそれぞれの仕事世界の方言といていい。それを共通語と誤解することが、人間には起こりがちなのだ。

しかし私は、これを仕方がないとは考えない。ことばは相手に受け取られて初めて存在したことになるのであって、口にすればもう自明のこととしてことばが存在するわけではない。考えてみれば、勝手にしゃべっているだけで、まったく相手に伝わっていない、「死骸ことば」の、何と多いことか。

それでは一体、何がことばを死骸でなくするのか。たった一つ、相手への思いやりだと私は思う。わかってももらえるかどうか、相手の事情を十分思いやったことばは、わかりやすい。すぐ受け取ってもらえる。やさしいことばだ。反対に、自分勝手に決め込んだことばは、暴力的なことばだ。あらゆる場合に、ことばを成り立たせる条件は、たった一つ、思いやりなのである。

(国文学者・京都市立芸術大学学長)
こくぶんがくしや きょうと しりつげいじゅつだいがくがくちやう